

学 位 論 文 の 要 旨

専 攻 社会文化学専攻

学生番号 75425107

氏 名 中野祥子 印

1 論 文 題 目

在日ムスリム留学生の困難と対処方略からみた異文化適応

2 論 文 の 要 旨

2008年に、『留学生30万人計画』が策定されて以降、多様な文化背景を持つ学生が増える中、ムスリム留学生の増加に注目が集まっている。日本の大学では、ムスリム学生の宗教的ニーズを満たす食の戒律や礼拝習慣への配慮が進むが、彼らの異文化適応に関する研究は未開拓である。本論文は、在日ムスリム留学生の異文化接触場面における困難と対処の観点から、彼らの異文化適応像の解明を試みたものである。

第1章では、本研究の背景、問題意識と目的について論じた。また、在日留学生の異文化適応に関する先行研究を概観し、在日留学生の異文化適応の傾向や適応促進要因、課題について把握した。それを踏まえて、在日ムスリム留学生の異文化適応に関する先行研究を概観し、研究上の課題を明らかにした。在日留学生の異文化適応に関する研究は多岐に渡るが、留学生の文化背景ごとに検討したものは、留学生最多数の中国人学生を対象とした研究が中心である。宗教に基づいた特有の文化的価値観を持つ小集団にも目を向けることは大学の多文化化に備えた課題の一つであろう。ところが、在日ムスリム留学生に関する研究は、宗教的な特徴の把握、イメージ調査やニーズ調査が中心で、異文化接触上の現象について心理学的視点から取り扱った研究は僅少であった。その僅かな例も、留学生全体を調べた研究の中で異質な事例の1つとして補足的に紹介される程度に留まっていた。そこで本論は、在日ムスリム留学生の異文化適応を実証的に解明すべく、異文化接触上の困難、対処方略、ホストとの関係形成という視点から検討を行った。そして、彼らの異文化適応像をもとに、適応上の課題と適応を支援する異文化間教育について論じた。

第2章では、在日ムスリム留学生21名に面接調査を行い、異文化接触上の困難を調べた。その結果、彼らが社会生活上の困難と対人行動上の困難を経験していることが明らかになった。具体的には、日本文化的価値観や振舞いを受容する困難と、ムスリムとしての信仰を保持する困難が挙げられた。

第3章では、第2章で確認された困難への対処方略を探った。その結果、日本文化に合わせていく対処、宗教規範を含む母文化の保持を試みる対処、両文化の規範を調節しながら折り合いをつけていく対処がみられた。加えて、礼拝や信仰心を用いた認知的対処方略も見いだされた。礼拝をして困難感を解消したり、神からの試練として困難を受け入れたり、来世に目を向けることで問題の評価を縮小させたりしていた。宗教的価値観は困難の原因となる一方で、心理的適応の方略としても機能することがわかった。また、対処の内容がホストとの交流に影響を与えていた。ホストからの距離をある程度確保する場合は、日本文化的価値観や行動の取り入れを制限し、信仰を保持する

ことで心理的安寧を得ていた。彼らの適応像は、自己の認知や行動を変容しながらホスト社会に調和していくことを想定した社会文化的な適応観には、必ずしも即さないものであった。ホスト社会の干渉を避けながら心理的な安定をはかる、併存型適応とでもいうべきスタイルが見いだされた。

第4章と第5章では、第2章と第3章のインフォーマントの中から5名を対象に、2年後の追跡面接により、縦断的視点での検討を行った。第4章では、2年後について滞在初期からの困難の変容を探った。社会生活上の困難、すなわち禁忌に触れない食べ物の手配や礼拝場の確保等の困難は、時間経過に伴い対処の要領を得ることで困難感が減少していた。一方で、対人行動上の困難は維持、あるいは増加していた。だが、周囲のイスラーム教に対する理解が進んだ場合は、宗教的な実践に伴う説明の煩わしさが解消していた。第5章では、ホストとの関係形成プロセスについて、時間軸に即して整理し、事例的検討を行った。その結果、信仰保持とホストとの交流意欲のバランスの取り方次第で関係形成をするうえでの困難への対処方略が異なっていた。そして、母文化保持とホストとの対人関係形成の成立の両立は可能であることが示された。母文化を保持したままでも、理解を促す説明をしたり、宗教的実践のための交渉を行ったり、日本人に合わせたソフトな物の言い方を取り入れたりして、関わりを持とうとする積極的な対処方略がみられた。また、日本人側によるイスラーム的価値観への理解があれば、信仰保持を前提とする彼らとの関係形成は進みやすいことがわかった。

第6章では、日本人ホストの視点から、ムスリム留学生との関係形成について検討した。具体的には、交流時に抱いた戸惑いと関係形成および維持のための工夫を探った。日本人ホストは、ムスリム留学生の宗教的規範に戸惑いながらも、文化差を顕現化しないように努めていた。また、ムスリム文化について予め知っておくことで、交流時の戸惑いを減らしたり、配慮に役立てたりできる可能性が示唆された。そこで、第7章と第8章では、日本人にムスリム文化の理解を促すことを目的とした文化学習の教材作成を試みた。第2章で挙げられた、ムスリム留学生が日本人学生との交流時に抱いた文化摩擦の事例を題材とした、文化アシミレーターを試作した。そして日本人学生が彼らの困難について、どの程度予測できるのかを探った。第6章では、日本にいる日本人学生を対象にした。第7章では、ムスリムが9割を占めるインドネシアに留学している日本人留学生の回答を分析した。日本にいる日本人学生はムスリムに馴染みが乏しく、在日ムスリム留学生が困っている原因として宗教規範の差に思い及びにくい傾向があった。一方、普段からムスリムと関わる在インドネシア日本人留学生にとっては、宗教的要因にまつわる推測がよくみられた。この教材は、ムスリムに馴染みの薄い学習者が文化学習を進めるのに適すると考えられた。

第9章では、第7章と第8章で作成したムスリム文化アシミレーターを用いて、日本人学生を対象とした異文化間教育を試行した。学習者はこのセッションを通して、ムスリムの文化的知識を獲得し、宗教規範も誤解の種になり得ることの気づきを得ていた。さらに、ムスリム留学生との付き合いに関して、相手の宗教的ニーズを聞いて配慮することと、自分の常識を押し付けないことが重要であることを理解した。加えて、ムスリム留学生との交流意欲の高まりもみられ、ムスリムとの交流を想定した異文化間教育として肯定的な反応が確認された。

終章である第10章では、各章の研究結果から得られた知見を基に、在日ムスリム留学生の異文化適応像についてまとめ、彼らにとっての適応上の課題と異文化間教育について論じた。文化的同化を必ずしも前提としない適応スタイルを持つ彼らの場合、信仰保持を試みながら、ホスト社会との折り合いをつけていくことが適応上の課題である。最後に、適応支援としての異文化間教育の試みについて提案的に論じた。